

上信越自動車道関係発掘調査報告書XX

海道遺跡 II

2014

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 上信越自動車道関係発掘調査報告書XX

## かいどう 海道遺跡 II

2014

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

上信越自動車道は、群馬県藤岡ジャンクションから分岐し、長野県を経て新潟県上越市に至る総延長 203km の高速自動車道です。この路線は関越自動車道と北陸自動車道とを結ぶ自動車道として、関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として 1999 年 10 月に全線が開通しました。これによって沿線・沿岸地域の発展に多大な効果をもたらしています。

新潟県教育委員会は 1988 年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、1995 年度には長野県境から中郷インターチェンジ間の発掘調査を、1997 年度には上越ジャンクションから中郷インターチェンジ間の発掘調査を終了し、県内全線の調査業務を完了しています。その後、東日本高速道路株式会社が、長野県信濃町から上越ジャンクションの間で、冬季の円滑な交通確保と近年の交通集中による渋滞解消等を目的に 4 車線化事業を行っています。

本書はこの上信越自動車道の 4 車線化事業に伴い、2013 年度に行つた海道遺跡の調査報告です。海道遺跡は 1995・1996 年度に行つた発掘調査によって、古代から近世までの多数の遺構・遺物が出土し、山裾に営まれた集落遺跡であることがわかりました。

今回の調査でも掘立柱建物・井戸・ピット・溝を検出し、古代から近世までの遺物が出土しました。

今回の調査成果が当地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、当地域の歴史資料として広く活用されるものと期待しています。

最後にこの調査に際して、多大なご理解とご協力をいただいた東日本高速道路株式会社に対して、厚くお礼を申し上げます。

2014 年 2 月

新潟県教育委員会

教育長 高井 盛 雄

## 例　　言

- 1 本書は、新潟県上越市向橋字海道 1043 番 2 ほかに所在する海道遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は上信越自動車道の 4 車線化事業に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委）が東日本高速道路株式会社から受託して実施したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。
- 4 埋文事業団は掘削作業等を株式会社古田組に委託して、発掘調査を実施した。
- 5 海道遺跡の発掘調査は 1995（平成 7）・1996（平成 8）年に続き 3 回目で、報告書は 2 冊目である。
- 6 出土遺物の注記は「13 カイ」とし、出土地点や層位等を併記した。
- 7 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び図面図版・写真図版の番号は一致する。
- 8 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔　〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合はそれぞれにその出典を記した。
- 10 本書の図中で示す方位はすべて真北である。
- 11 造構図のトレース及び各種図版作成に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる製版を実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 12 本書の執筆は田部 淳（株式会社古田組遺跡調査研究室主任調査員）が担当し、佐藤友子（埋文事業団 専門調査員）が編集した。
- 13 調査成果の一部は現地説明会（2013 年 9 月 28 日）で公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 14 出土遺物及び調査・整理に係る各種資料・データ類は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターで保管・管理している。
- 15 発掘調査から本書の作成まで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）  
相羽重徳　　上越市教育委員会　　上越市向橋町内会

## 目 次

第Ⅰ章 序 説 .....	1
1 調査に至る経緯 .....	1
2 調査の経過 .....	1
3 調査及び整理の体制 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	2
1 遺跡の位置 .....	2
2 周辺の遺跡 .....	3
A 古 代 .....	3
B 中 世 .....	3
第Ⅲ章 調査の概要 .....	5
1 グリッドの設定 .....	5
2 基本層序 .....	5
3 遺 構 .....	7
A 概 要 .....	7
B 各 説 .....	7
4 遺 物 .....	8
A 概 要 .....	8
B 各 説 .....	8
第Ⅳ章 ま と め .....	9
1 遺構について .....	9
2 遺物について .....	9
《引用・参考文献》 .....	10

## 挿図目次

第 1 図 上信越自動車道と遺跡の位置……………2	第 3 図 グリッド設定図・基本順序図……………6
第 2 図 高田平野における古代・中世の遺跡分布…4	

## 表目次

第 1 表 周辺の主要遺跡……………3
---------------------

## 図版目次

### 【図面図版】

図版 1 1995・1996・2013 年度造構全体図
図版 2 2013 年度造構全体図
図版 3 造構個別図
図版 4 土器・磁器、木製品

### 【写真図版】

図版 5 全景・基本順序・SB5
図版 6 SB5・SE9・P1
図版 7 P1~4・6
図版 8 P6・P8・P13・P14・P15
図版 9 P15・P16・P18・SD17・SD370
図版 10 土器・磁器、木製品

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

上信越自動車道は、群馬県藤岡ジャンクションから新潟県上越ジャンクションの間の総延長 203km の高速自動車道である。本路線は、関越自動車道と北陸自動車道とを結ぶ基幹輸送体系として、また沿岸地域の各種開発整備計画と関連して、社会経済活動に大きな役割を果たすものとして期待され、1999 年に開通している。このうち旧中郷村から上越市については 1973 年 11 月に基本計画、1989 年 1 月に整備計画が決定されている。1990 年 4 月に日本道路公団から依頼を受けた新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が当該区間の踏査を行った結果、当遺跡が新発見の遺跡であると確認され、平成 3 年に周知化した。県教委は日本道路公団の依頼をうけ、1995・1996 年度の 2 か年にわたり 4,800m<sup>2</sup> の発掘調査を行った。今回の調査は東日本高速道路株式会社が、冬季の円滑な交通確保と交通集中渋滞の緩和対策で、上信越自動車道の長野県信濃町～上越ジャンクション間の 4 車線化事業に伴い行ったもので、前回の未調査地区 175m<sup>2</sup> が今回の調査地点となる。

## 2 調査の経過

2013 年 8 月 19 日から 26 日に調査機材等の搬入・敷設板敷設・事務所設置等の事前準備を行った。8 月 27 日から 8 月 29 日まで、調査区の中央を通る市道の法面と西側斜面上止の矢板の打込み作業を行った。9 月 27 日に調査を開始し、バックホーで杉の伐採根が残る表土の除去作業をおこなった。上信越自動車道建設工事時に旧表土上に敷設されたシートを確認し除去後、表土・遺物包含層を慎重に掘削し、遺構確認面であるⅦ層上面まで除去した。9 月 2 日から人力による遺構検出・遺構掘削調査を行い、9 月 21 日に調査を完了した。9 月 24 日に遺構平面測量を行った。9 月 25 日に文化行政課から発掘調査終了確認を得た。9 月 28 日には調査現場で周辺の住民への現地説明会を開催し、12 名の参加があった。埋戻しを行った後、10 月 11 日に東日本高速道路株式会社に現地を引き渡した。

## 3 調査及び整理の体制

発掘調査・整理作業は以下の期間・体制で行った。発掘調査と並行し遺物の洗浄注記を行った。本格的な整理作業は株式会社古田組遺跡調査研究室で図面整理・写真整理・遺物実測・トレース・写真撮影・原稿執筆・編集作業・校正等を行った。

調査期間	2013(平成25)年8月19日～10月11日	庶務	仲川国博（同 所長）
整理期間	2013(平成25)年9月30日～ 2014(平成26)年1月31日	調査総括	高橋 保（調査課長）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）	指導	田海義正（同 本発掘調査担当課長代理）
調査	財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	調査担当	佐藤友子（同 専門調査員）
総括	木村正昭（事務局長）(2013年12月31日まで) 土肥 浩（事務局長）(2014年1月1日から)	支援組織	株式会社古田組
管理	熊倉宏二（總務課長）	現場代理人	竹内一喜（同 遺跡調査研究室管理長）
		調査員	田部 淳（同 調査課 主任調査員）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置

上越市は2005(平成17)年に周辺13町村と大合併を行っており、新潟県の南西部に広がる高田平野のほぼ全域と周辺の山間部を市域としている。東から米山山地、南東から北東部にかけては東頸城山地、西に西頸城山地、南側には妙高山が連なる。高田平野にはこれら三方を囲む山々を源流とする大小の河川が流入して形成した扇状地が発達している。この扇状地の大部分が上位の高田面と下位の関川面との2段の沖積段丘によって形成されている。上位の高田面は疊層・砂層・シルト層の互層からなる高田層によって形成された堆積面で、古墳時代初頭から数回に及ぶ洪水性堆積物によって覆われながら、平安時代には段丘化したものと考えられる。下位の関川面は関川及びその支流が浸食した面で、関川とその支流に沿って認められるにすぎない。

河川は西頸城山地に源流をもつ関川が最大で、妙高山麓をぬけ片貝川・矢代川・正善寺川、東頸城山地東部から西流する保倉川、南東部からの飯田川とも合流しながら日本海へとそそぐ。これらの河川により山麓部では扇状地形、河川流域の低地部では自然堤防が発達している。

高田平野の東から西にかけては部分的に洪積台地がみられている。これは3段に区分されており、上位より飯喰沢面、中位の愛の風面、下位の平山面と呼称されている。飯喰沢面は赤色土壌とローム層をのせる面で、板倉区飯喰沢、浦川原区山本山山地などでわずかに見られる。愛の風面は赤色土壌とローム層を伴う粘土層と砂礫層をのせる面で浦川原区山本山、妙高市鶴川採石場などで見られる。平山面は西縁部の灰塚・平山・岩木・山屋敷などの集落、音原神社をのせる段丘などがある。海道遺跡は標高約24mで氾濫原堆積物上位高田面にある。(〔高橋2005〕から抜粋・引用した。)



第1図 上信越自動車道と遺跡の位置

(原図 2004年3月修正「上越市街図」1:10,000 上越市役所)

## 2 周辺の遺跡

周辺の遺跡については前回報告の『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第150集 海道遺跡・大塚遺跡』に詳しいので、今回は関川周辺の古代・中世の遺跡について概観する。〔(飯坂・高橋ほか2011) から抜粋・引用した〕

### A 古代

古代については遺跡の分布を見ると、東頸城丘陵端部と別所川・大熊川の扇状地に集中する。また飯田川・保倉川の自然堤防上にも多くの遺跡が存在する。

頸城郡は大宝2年(702)に古志・魚沼・蒲原の3郡とともに、越後国へ編入される以前は越中国に属していた。越後国に編入後、頸城郡に国府が設置されていたと10世紀中葉に編纂された『和名類聚抄』に記載されている。しかし、国府跡・国分寺跡の所在は未だ確定していない。官衙関連と寺院と推定される遺跡は、上越市今池遺跡(9)・妙高市栗原遺跡(13)・上越市本長者原魔寺(12)であり、このうち妙高市栗原遺跡は基壇跡や大型の掘立柱建物跡の検出、「郡」と記された墨書き土器、帶金具の出土から頸城郡衙に関連する遺跡と推定されている〔高橋1984〕。また今池遺跡と周辺については8世紀前半～9世紀前半の掘立柱建物が多数検出され、円面鏡・瓦片等が出土していることから国府に関する有力な候補地とされている。これらの遺跡に須恵器を提供していた古窯跡は、平野西部の丘陵裾に多く築かれていた。7世紀末に下馬場古窯跡群(29)から開始され、8世紀代に向橋窯跡・滝寺・大貫古窯跡(30・31)の海道遺跡周辺の窯跡群でも活発に生産されていたが、9世紀中葉から佐渡小泊窯群産の製品が主体を占めるようになる。岩ノ原遺跡(20)は、「石井庄」「石井」「石庄」等と書かれた墨書き土器が51点出土したことから、8世紀中葉に上越地方で成立した「東大寺領石井荘」の莊園遺跡であることが判明した。物資の搬出入関連と推定される建物は8世紀末から9世紀第2四半期、荘所の建物は9世紀第2～第3四半期頃のものである〔高橋ほか2008〕。

### B 中世

中世については依然国府が頸城地方にあり、関川下流の直江津周辺に、上杉氏の居館の御館跡・守護所と推定される至徳寺跡(32)・安国寺跡(34)が立地し、越後の中心都市としての繁栄をみせる。他方中世の集落遺跡・城館跡・塚・墳墓・寺院跡などが高田平野周辺の丘陵部・自然堤防上に見られる。このうち集落遺跡については下割遺跡(2)・樋田遺跡(21)・子安遺跡(10)等があり、これらの集落遺跡は掘立柱建物、井戸などを溝で区画し屋敷地としている。この屋敷地が集合して集落を形成している。横曾根I遺跡(8)〔水澤2003〕は、幅広の溝(堀)に囲まれ区画され、さらに青磁の酒会壺等も出土し、居館的性格をもつと考えられる。

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	海道遺跡	古代～近世	8	柳垂根I遺跡	中世	15	賀田遺跡	奈良	22	永久保道路	中世
2	下削遺跡	古墳～中世	9	今池遺跡	奈良・平安	16	東津遺跡	平安	23	神印遺跡	古墳・中世
3	風穴遺跡	縄文～古代	10	子安遺跡	弥生～中世	17	一之口遺跡	古代	24	市川寺遺跡	平安・中世
4	二角川遺跡	古代～近世	11	黒瀬川遺跡	古代	18	八反田遺跡	古代	25	浦山遺跡	平安・中世
5	延命寺遺跡	古墳・古代	12	本長者原魔寺	古代	19	山頭遺跡	弥生・飛鳥	26	名ノ原遺跡	古墳・中世
6	鬼敷側面遺跡	古代	13	栗原遺跡	古代	20	岩ノ原遺跡	平安	27	末野窯跡	平安
7	越前遺跡	古代	14	月岡遺跡	古代	21	樋田遺跡	中世	28	日向窯跡	奈良

第1表 周辺の主要遺跡



第2図 高田平野における古代・中世の遺跡分布

(国土地理院発行「高田平野東部」「高田平野西部」「林崎」1:50,000原図【石川県 2012】を一部改変の上転載)

## 第III章 調査の概要

### 1 グリッドの設定

今回の調査区は1995年度と1996年度調査区の間にあることから、同じグリッドを使用した。日本測地系座標を基準に10mの方眼を組んで大グリッドとし、大グリッドを2m四方に25等分したものを小グリッドとした。グリッドは北から南へ算用数字の1～12、東西は西から東へアルファベットの大文字でA～Gを付している。グリッドの呼称は大グリッドと小グリッドの組み合わせで4B20等と表記した。今回調査区の3Cグリッド北西隅の座標値はX:121750、Y:-24570で北緯37度5分48秒、東経138度13分24秒である。5Cグリッド北西隅の座標値はX:121730、Y:-24570で北緯37度5分37秒、東経138度13分36秒である。

今回の調査区のグリッドと1995・1996年度のグリッドは同じ日本測地系を使用したにもかかわらず、東西方向の東方向に80cm程誤差がでた。この為、接続する遺構と1996年調査区の痕跡から位置の補正を行った。

### 2 基本層序

基本層序は前回調査と若干色調等が異なるが、おおむね対応している。

I層は1996年の調査で黒褐色土I層（表土・耕作土）とした盛土で、今回は色調の違いによりIa～Icの3層に分層した。

Ia層 にぶい黄褐色土(10YR5/3)で1～2cmの破碎礫を少量含む。炭化物を少量含む。

Ib層 黒褐色土(10YR3/2) Ia層に似るが、色調は暗い。

Ic層 暗褐色土(10YR3/3) Ia層に似るが、炭化物を多く含み、色調は暗い。

II層は1996年の調査で暗黄褐色土II A・暗褐色土II B・黄色土II C層の盛土としたものに対応するが、今回は前回とは色調が異なるのでIIa～IIcの3層に分層した。この盛土は北の山側から押し出した整地層で、南側ではなくなる。今回の調査区でも北では検出されるが、南ではなくなる。

IIa層 にぶい黄橙色土(10YR6/4) 1～5cm程の破碎礫が多量に混じる。

IIb層 褐灰色土(10YR5/1) IIa層に似るが、色調は暗い。

IIc層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。

III層は1996年の調査で黒褐色土III層（中世遺物包含層）としたものであるが色調が異なる。

III層 灰黄褐色土(10YR4/2) 近代～現代遺物も多く含み、擾乱されている。

IV層は1996年の調査で橙茶色土IV層としたものであるが色調が異なる。

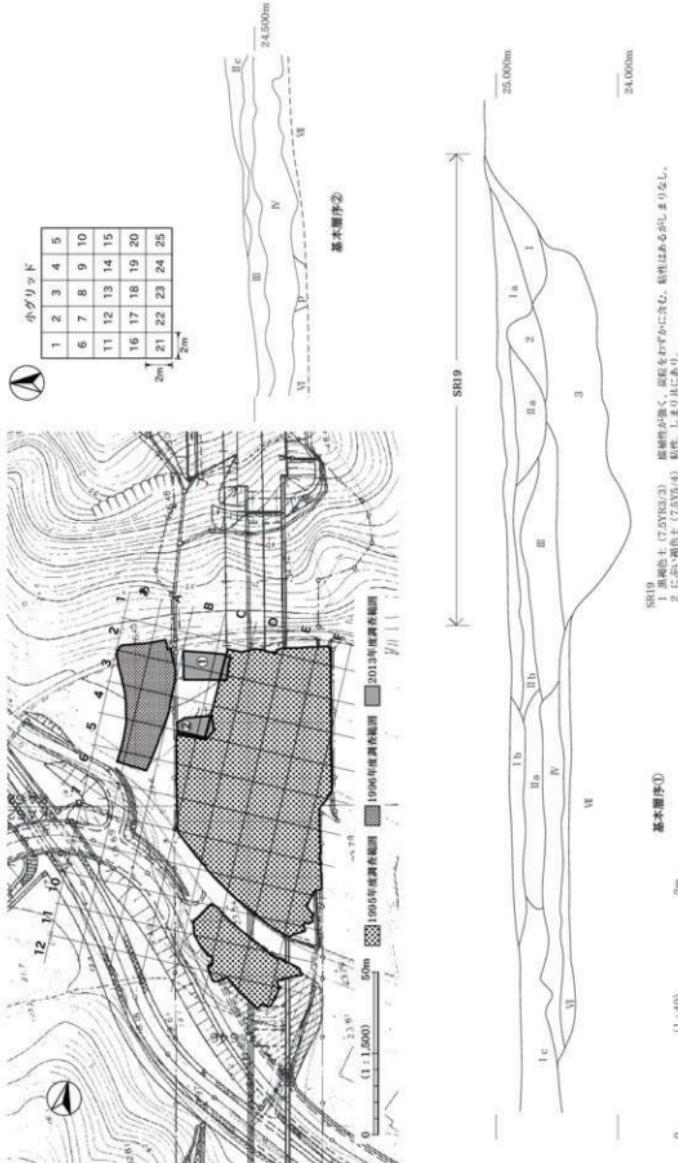
IV層 褐色土(7.5YR4/3) 炭化物少量含む。土師器・珠洲焼・土師質土器を含む。

V层は1996年の調査で暗黄色土VI層としたもので古代の遺物包含層である。

VI層 明褐色土(7.5YR5/8) 一部にIV層が混入し、粘性はやや強い。

VII層は1996年の調査で黄色土VII層としたもので地山面（遺構確認面）である。

VII層 明褐色土(7.5YR5/8) 遺構確認面である。しまりが有り、粘性は強い。



第3図 グリッド設定図・基本層序図

### 3 遺構

#### A 概要

今回の調査では掘立柱建物 1 棟・井戸 1 基・ピット 14 基・溝 2 条を検出した。いずれもⅦ層上面で検出している。前回調査の集落の一部である。検出遺構については遺構種別に関係なく通し番号を付している。遺構各説では、遺構種別ごとに番号順で記載した。遺構略号は SB：掘立柱建物、SE：井戸、P：小穴・柱穴、SD：溝、SR：自然流路である。遺構の規模はいずれも確認面からである。

3B グリッドで自然流路 (SR19) を検出した (第3図)。形状、覆土の堆積状況から沢状地形の端部と判断した。東端に小規模な湧水源がある。出土遺物はない。

#### B 各説 (図版 3・5 ~ 8)

**SB5** 4C グリッドに位置する。今回の調査では 3 基の柱穴 SB5-P1 ~ 3 を検出しておらず、1995 年に検出した柱穴 P154・P156 と合わせると、桁行 2 間 (3.4m) 枠間 1 間 (2.4m) の掘立柱建物となる。P1-P2 の柱間は 1.6m、P2-P3 の柱間は 1.8m である。柱穴の平面規模は P1 の 23cm から P156 の 40cm までである。深さは P3 の 15cm から P156 の 45cm とやや異なる。長軸方位は P1 ~ 3 を基軸とすると N-19°-W である。P1 は長軸 23cm 短軸 22cm の略円形で深さは 25cm で断面形は V 字状である。P2 は長軸 30cm 短軸 25cm の楕円形で深さは 35cm。東西側の断面形状は V 字状で柱痕がある。P3 は長軸 40cm 短軸 38cm の円形で深さは 12cm、断面形は半円状である。遺物は P3 から土師器 5 点が出土している。

**SE9** 4B24 グリッドに位置する。SD370 との新旧関係は明確ではない。一辺約 1m の隅丸方形で、掘形は底部に向かいやすくなるように掘り込まれる。深さは 192cm で底面は平らである。覆土は 2 層に分層し、1 層は褐色である、2 層は底面まで褐色土の単層となる。炭化物を少量含み、硬くしまる。出土遺物は土師器・須恵器片が 18 点、底面から木製品 4 点 (平鍵 2・平鍵未製品 1・曲物側板 1) が出土している。

**P1** 4B18 グリッドに位置する。長軸 28cm 短軸 27cm の略円形、深さは 10cm で断面は台形状である。覆土は VI 層に相当する明褐色土に IV 層相当の褐色土が混じる。出土遺物は土師器 1 点である。

**P2** 4B15 グリッドに位置する。長軸 40cm 短軸 35cm の楕円形、深さは 10cm で断面は弧状である。覆土は IV 層に相当する褐色土で炭化物を少量含む。出土遺物は土師器 1 点である。

**P3** 4C16 グリッドに位置する。長軸 60cm 短軸 53cm の略円形、深さは 8cm で浅い弧状の断面である。覆土は IV 層に相当する褐色土で、明褐色土が少量混じる。出土遺物はない。

**P4** 4C16 グリッドに位置する。長軸 26cm 短軸 23cm の略円形、深さは 33cm の V 字状で柱痕がある。覆土は褐色土中に炭化物を少量含む。出土遺物はない。

**P6** 4B15 グリッドに位置する。長軸 25cm 短軸 24cm の円形、深さは 10cm で断面半円状である。覆土は IV 層に相当する褐色土で柱痕がある、出土遺物はない。

**P8** 4C17 グリッドに位置する。長軸 35cm 短軸 32cm の円形、深さは 25cm、断面 U 字状である。出土遺物は土師器が 4 点である。

**P14** 2B21 グリッドに位置する。長軸 60cm 短軸 54cm の円形、深さは 26cm、断面台形状である。覆土は 3 層に分層し、上 1 層が明褐色土で下 2 層が褐色土層である。破碎繊片が多量に混入する。出土遺物はない。

**P18** 2B・3B グリッドに位置する。長軸 80cm 短軸 70cm の楕円形である。底面に段を持ち、深さは 22cm である。覆土は 2 層で、繊片が多量に混入する明褐色土と灰褐色土に分層する。出土遺物はない。

**SD17** 2B・3B グリッドに位置する。北方向から東方向に弧状に延伸する溝状遺構で、検出した長さは約6m、幅は0.4～0.5m、深さは0.15m、断面形は逆台形の溝である。P18と重複し、これに切られる。覆土は单層で礫片を多量に混入する黄褐色土である。出土遺物はない。

**SD370** 4C グリッドに位置する。この溝は1995年度調査区で検出した SD370 の西側延長部にあたる。今回検出した長さは12m 程で前回調査の16m を合わせると延長は28m となる。幅は0.6m、深さ0.3m で断面形は逆台形である。P8 に切られる。SE9との切会いは不明である。出土遺物は土師器が75点出土している。1995年の調査では、近世の溝と考えられる SD700 と15m 離れて平行すること等から「出土している遺物は古代（土師器50点）であるが、近世の可能性がある」〔高橋2005〕(P53) とされる。今回の調査でも近世陶磁器は出土しておらず、遺構の上限は古代である。

## 4 遺 物

### A 概 要

出土した遺物は土器・陶磁器と木製品である。古代の土器は須恵器が17点、土師器が172点、中世の青磁（13世紀前半頃の鶴蓮弁文楕の小片）が1点、珠洲焼が2点、近世陶磁器が39点である。木製品は4点出土している。

### B 各 説（図版4・9）

**土器・磁器（1～12）** 1～6は須恵器である。1はSD370・2層出土の無台杯である。佐渡小泊産で9世紀中～後半頃のものである。2は3C1グリッド・VI層出土の小型の甕で、頸部はくの字に外反する。体部外面は平行線文タタキが施される。内面は同心円状のあて具痕が残る。3は2B・VI層出土の甕・瓶類の底部片で、貼り付け高台が欠損する。外面は自然釉が付着する。4は3B7グリッドIV層出土甕の体部片で外面は並行線文タタキ、内面は同心円状のあて具痕が残る。5は4BグリッドIV層出土の甕の体部片で外面は格子状のタタキ、内面は横位の粗いカキメと縦のハケメが施される。6は3B7グリッドVI層出土の甕で外面は格子状のタタキ、内面は同心円状のあて具痕が残る。焼成時の歪みがある。7は4BグリッドIV層出土の土師器無台楕である。底部切り離しは不明瞭である。8は2B出土。全体に摩耗しているが土師器長甕の体部下半の小片で外面はタタキが施される。9・10は珠洲焼である。9は4BグリッドIV層出土の甕体部片で外面にタタキ、内面に円形のあて具痕が残る。10は4BグリッドIV層出土で、底部に近い甕体部片で外面は縦方向のタタキが施される。11は2・3BグリッドI層出土の肥前系磁器染付の広東楕の蓋である。表には草文、見込みに銘が描かれるが文様は不明である。18世紀末から19世紀中頃のものである。12も2・3BグリッドI層出土の肥前系磁器染付の小楕である。文人と鶴等の絵（中国・宋の文人・林和靖の故事にちなむものか）が描かれる。19世紀前半から中頃のものである。

**木製品（13～15）** SE9の底面から平鉗（13・14）と平鉗の未成品？（15）が出土している。13・14とも長台形の柾目の板材を使用し、上下端を平らに成形し側面は面取りしている。13の柄孔は一部破損しているがほぼ台形に残る。14の柄孔も一部破損し多角形になっているが、本来は台形であったと推測される。13は長さ35.5cm・幅15.2cm・厚さ2.5cmである。14は長さ31.0cm・幅12.0cm・厚さ2.0cmである。15は厚みのある偏みかん削材を使用し成形加工を施しているが、柄孔の穿孔には至っていない。13・14とは木取が異なるなど、平鉗の未成品かどうか疑問も残る。15の長さは48.0cm・幅（16.8cm）、厚さ8.0cmである。3点とも腐植が著しい。

## 第IV章 まとめ

### 1 遺構について

海道遺跡は1995年度と1996年度に合計4,800m<sup>2</sup>の調査を行い、掘立柱建物11棟、井戸62基、土坑63基、溝53条と多数のピットを検出し、古代から近世までの集落遺跡であることが判明した。今回(2013年度)の調査は実質調査面積が124m<sup>2</sup>と狭小であったが、掘立柱建物1棟、井戸1基、溝2条、ピット14基を検出した。ここでは前回の調査結果との比較を簡単にまとめる。今回南側で検出した遺構の多くからは古代の土師器のみが出土しており、遺構の上限は古代と考えられる。1995年度の調査区と接続するSD370は、前回は古代の土師器のみが出土したが、近世の溝SD700と平行すること等から近世の可能性が高いとしている。しかし、今回の調査でもSD370からは土師器のみが出土しており、遺構の上限は古代であるが、下限が近世であるとまでは言えない。

北側で検出した遺構については、出土遺物が全くないことから所属時期は不明とせざるを得ないが、P14・P18・SD17の覆土に基本層序IIa層(盛土)とみられる破碎礫が含まれることから、IIa層堆積以前の遺構と考えられ、遺構検出はVII層上面で行ったが、IIb・IIc層からの掘り込まれた近世以降の遺構の残存と考えられる。ほかの北側のピットも同様に近世以降の可能性が高いと考えられる。

### 2 遺物について

出土遺物は土器では古代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼・土師質土器・青磁、近世の肥前系陶磁器、木製品では平鉗・同未成品?が出土した。遺物の出土は少量であるが、前回調査の結果とはほぼ同様の出土状況を示す。前回調査の出土土器量分布図によると、今回の調査区は周辺4C・3D・2Eラインを中心とした古代土器の分布が多い地点にあたり、古代の遺物が主体を占める。土師器については全て脆く小破片で出土しており、かろうじて図化できたものが2点(7・8)であった。須恵器は、そのほとんどが本遺跡周辺の淹寺・大貫古窯跡群産のものであり、時期は8世紀末から9世紀中葉にかけてのものである。須恵器の内2点(1)が佐渡小泊産で9世紀中~後半であった。このことも前回の調査結果と同様である。

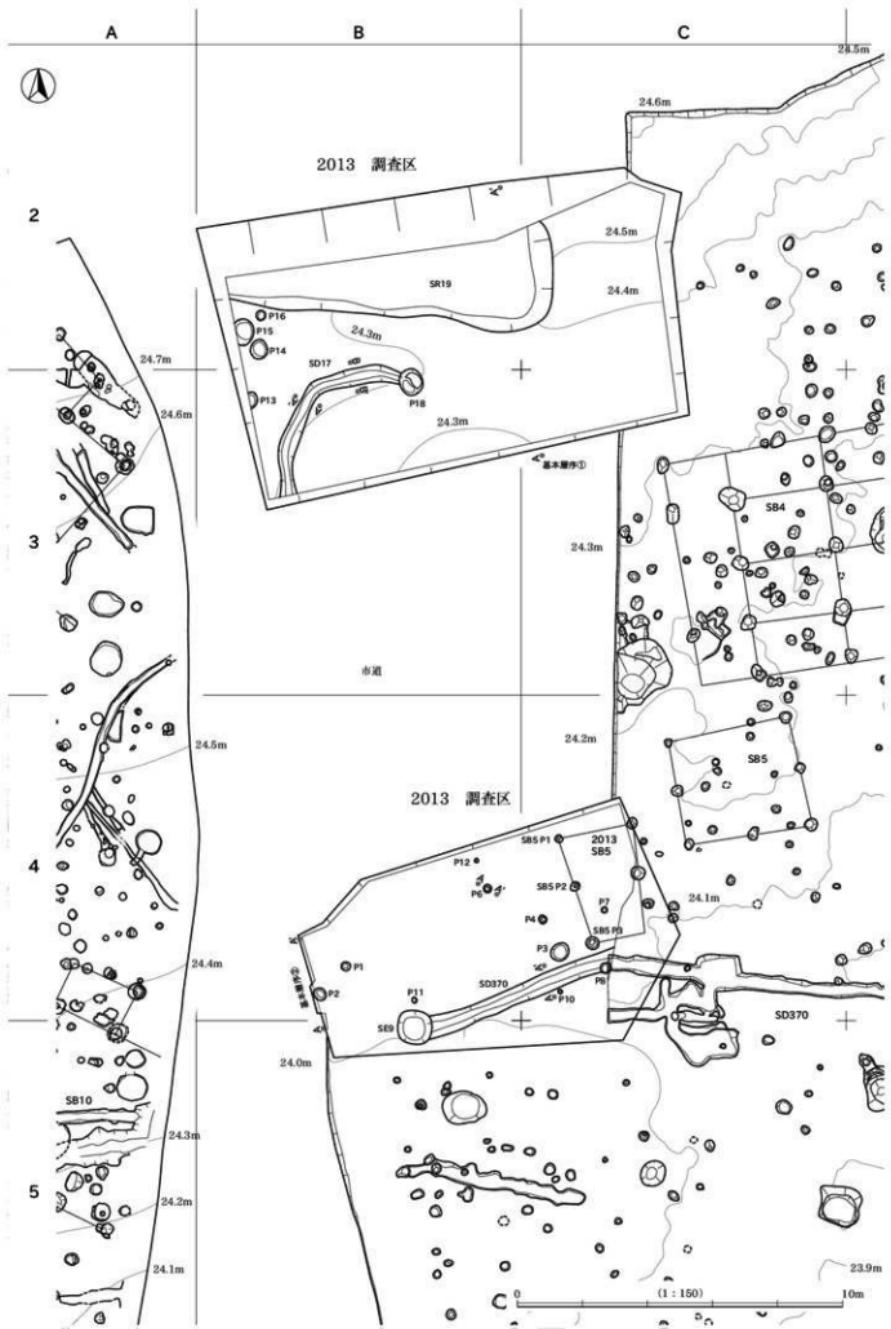
SE9の覆土から土師器・須恵器片が18点、また底面から平鉗が2点と平鉗の未成品?が1点・曲物側板が1点出土している。平鉗(13・14)は下が細くなる短冊状の柾目の板材を利用し、上下端は平らに成形し、中央に柄孔を台形に開ける特徴を持つ。同じ特徴を持つ平鉗は、新発田市砂山中道下遺跡〔佐藤2006〕のSE17出土と柏崎市東原町遺跡〔山崎ほか2005〕の5JP30出土、上越市新保遺跡〔石川ほか2001〕の97SE2729出土の3例を確認した。いずれも中世の遺構から出土している。新保遺跡出土のものは当遺跡出土の平鉗と同形であるが、砂山中道下遺跡と東原町遺跡の2例は下側縁部が丸みを持ち、本遺跡の平鉗より全長が短い。これらの平鉗の所属時期は中世であることから、本遺跡の平鉗も中世と考えられる。SE9からは古代の遺物も出土しているが、遺構の下限は中世である。平鉗の未成品?とした15は偏みかん割材を使用することから、別の器種の未成品の可能性もある。

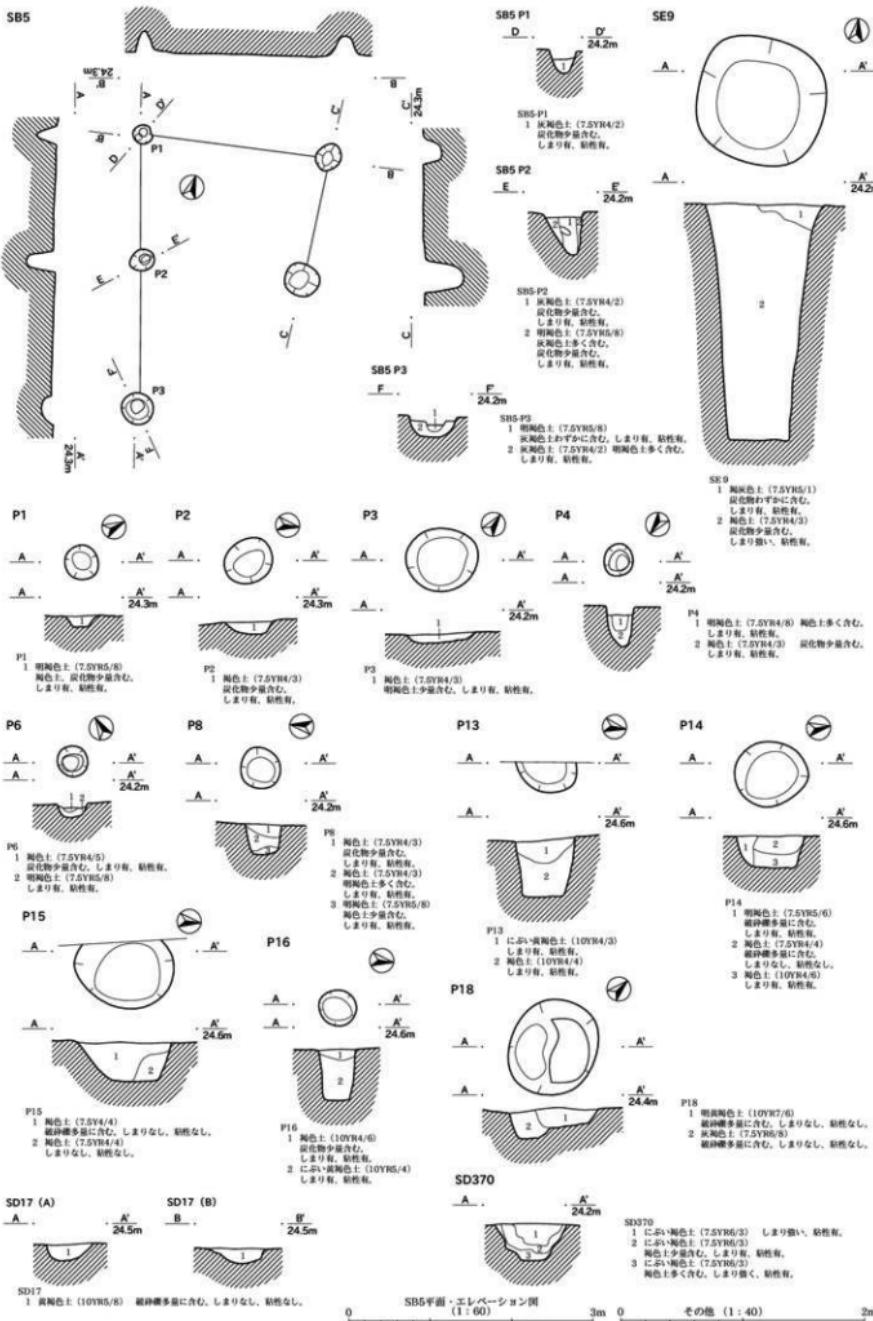
## 引用・参考文献

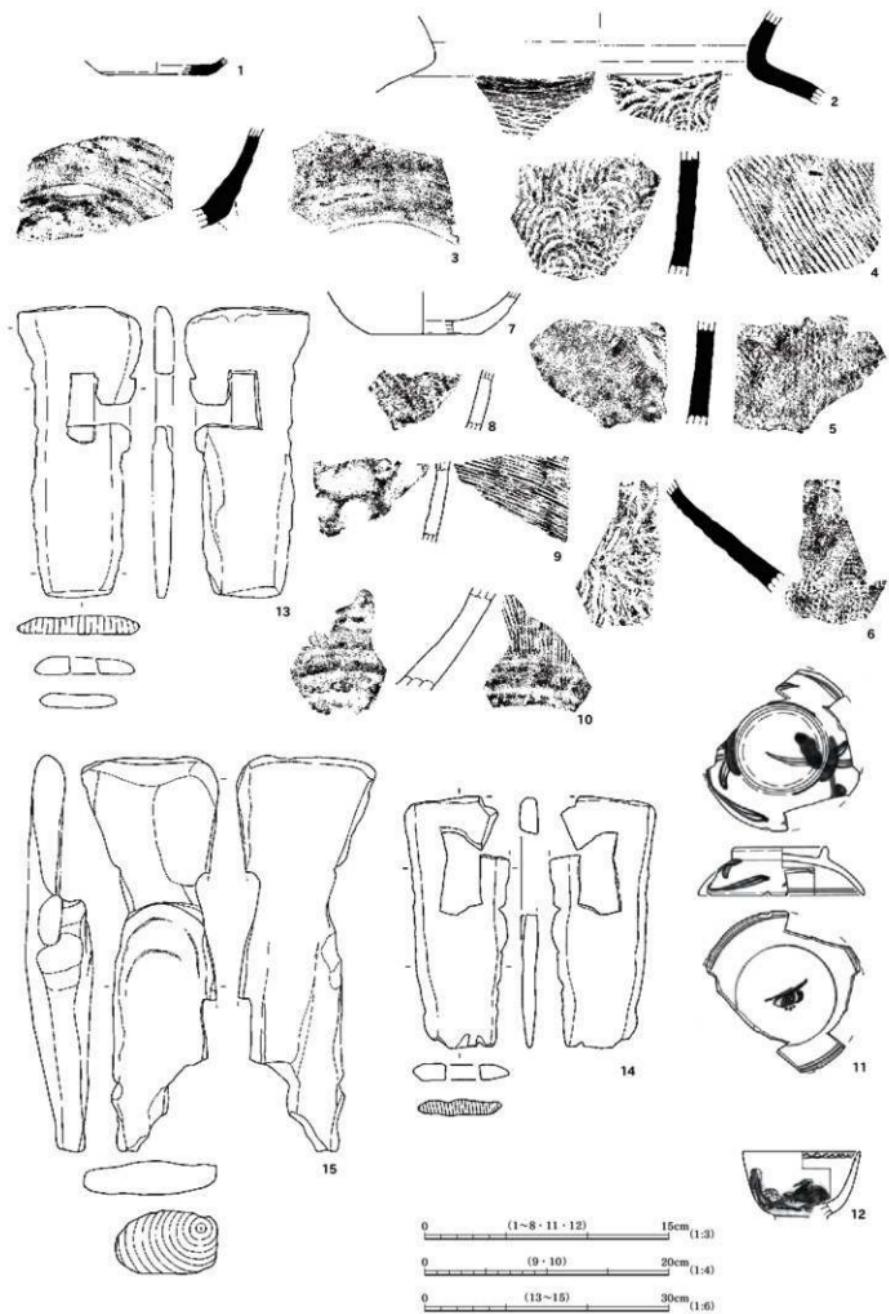
- 石川智紀<sup>著</sup> 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀<sup>著</sup> 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第230集 下削遺跡V』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰・高橋保雄<sup>著</sup> 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第227集『孤宮遺跡II・下削遺跡IV』』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏<sup>著</sup> 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集 下馬場遺跡・細田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子<sup>著</sup> 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良<sup>著</sup> 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集『東原町遺跡・下沖北遺跡II』』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井秀弥<sup>著</sup> 1984 『新潟県埋蔵文化財調査事業団報告書 第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 佐藤友子<sup>著</sup> 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第227集 野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第150集 海道遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 勉<sup>著</sup> 1984 『東原遺跡第7次・第8次発掘調査報告書』 新潟県新井市教育委員会
- 高橋保雄<sup>著</sup> 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第182集 岩ノ原遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 2003 『横曾根遺跡』『上越市史叢書8 考古－中・近世資料－』 上越市

図 版











2・3BC グリッド調査前全景（東から）



4・5BC グリッド調査前全景（南から）



2・3BC グリッド全景（東から）



4・5BC グリッド全景（東から）



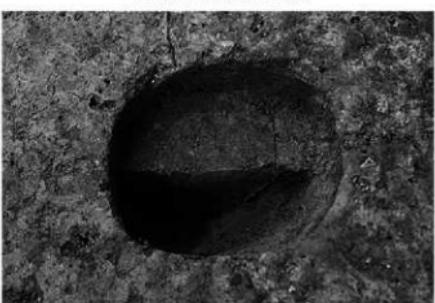
3B グリッド基本層序（西から）



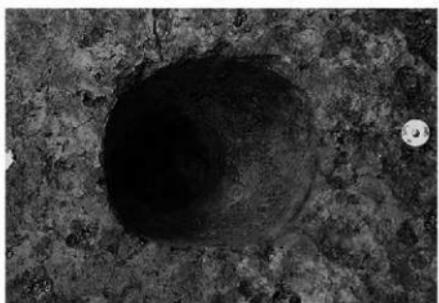
4B グリッド基本層序（東から）



SB5 検出状況（南から）



SB5-P1 断面（東南から）



SB5-P1 完掘 (東南から)



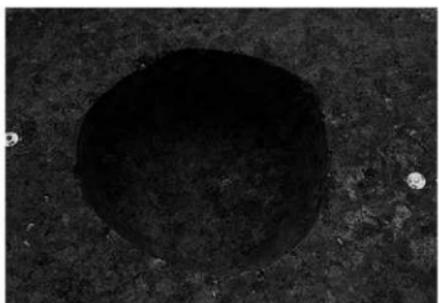
SB5-P2 断面 (東南から)



SB5-P2 完掘 (東南から)



SB5-P3 断面 (北東から)



SB5-P3 完掘 (北東から)



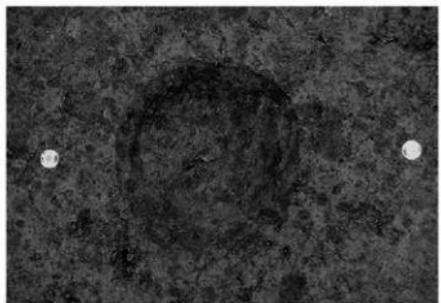
SE9 断面 (南から)



SE9 完掘 (南から)



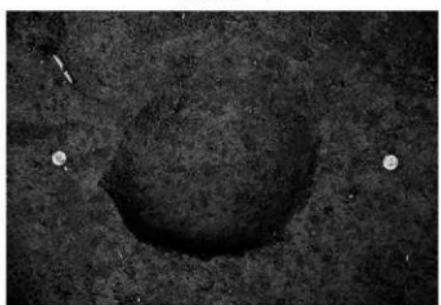
P1 断面 (東南から)



P1 完掘（東南から）



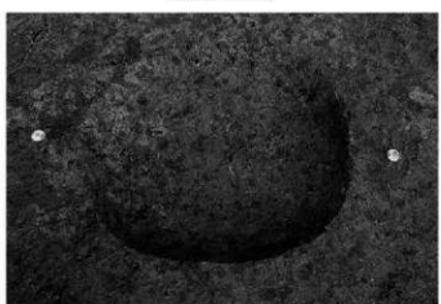
P2 断面（東から）



P2 完掘（東から）



P3 断面（東南から）



P3 完掘（東南から）



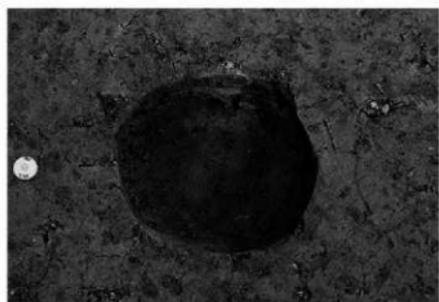
P4 断面（北西から）



P4 完掘（北西から）



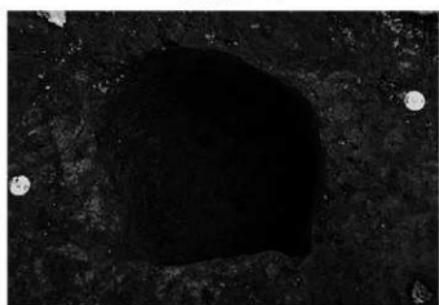
P6 断面（南西から）



P6 完掘（南西から）



P8 断面（西から）



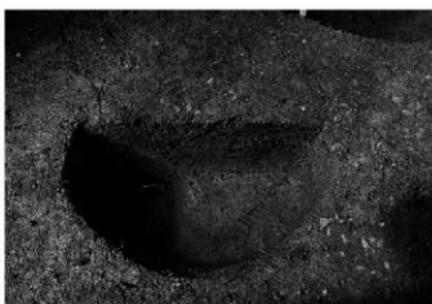
P8 完掘（西から）



P13 断面（東から）



P13 完掘（東から）



P14 断面（北から）



P14 完掘（東から）



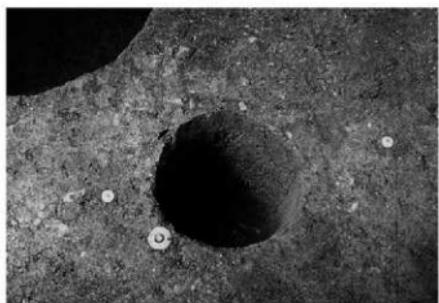
P15 断面（東から）



P15 完掘（東から）



P16 断面（東から）



P16 完掘（東から）



P18 断面（東から）



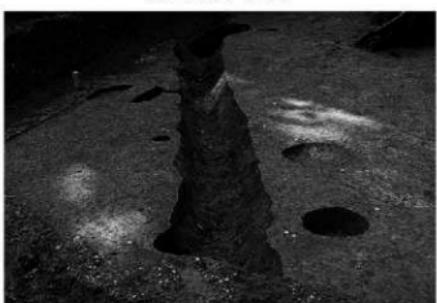
P18 完掘（東から）



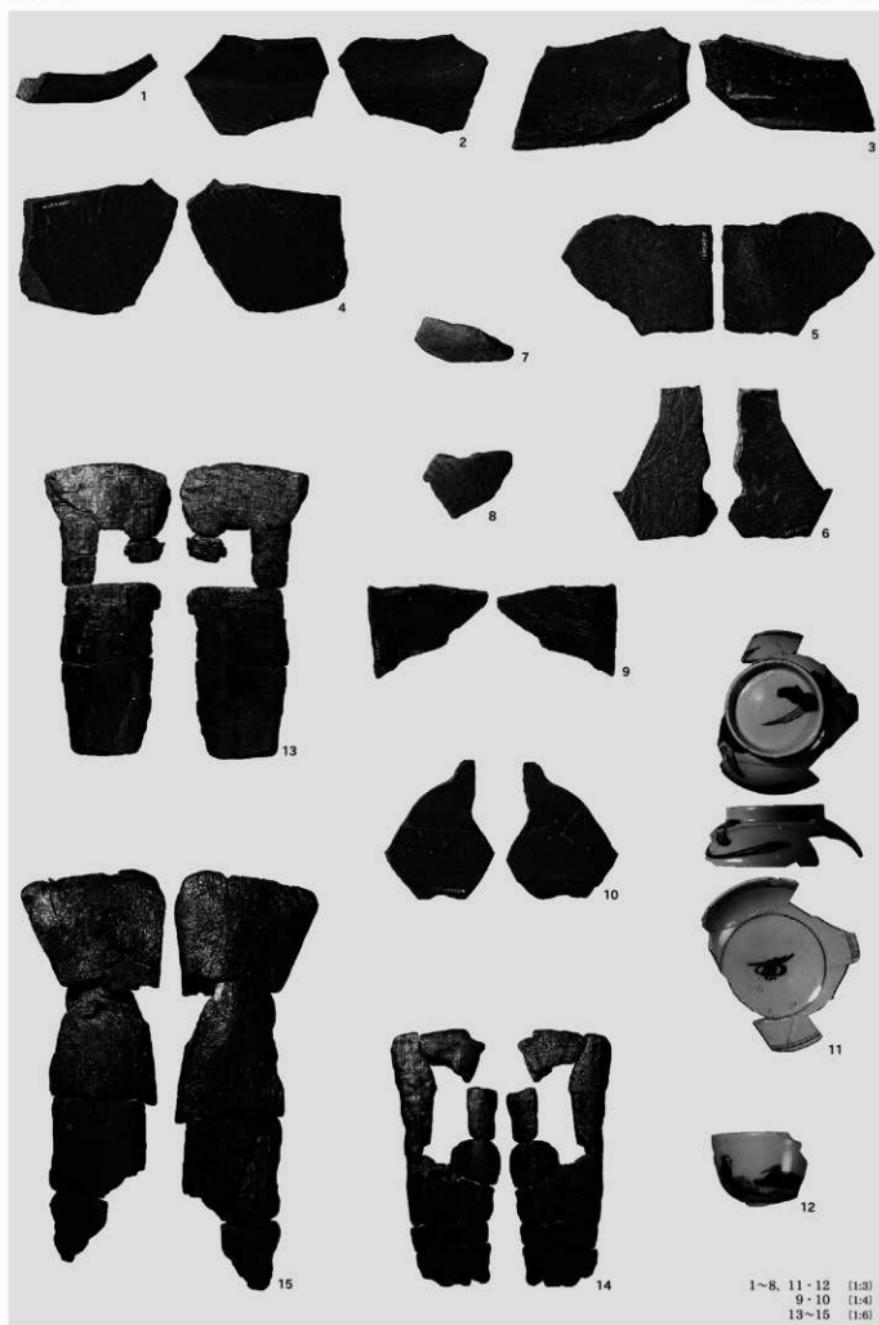
SD17 断面 B-B'（南から）



SD370 断面（東から）



SD370 完掘（東から）



## 報告書抄録

ふりがな 書名	かいどういせきに 海道遺跡2						
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書 20						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第250集						
編著者名	田部 淳(株式会社古田組) 佐藤友子(新潟県埋蔵文化財調査事業団)						
編集機関	財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	2014(平成26)年2月21日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
海道遺跡 <small>新潟県上越市向橋 字海道 1043番2</small>	15222	216	37°5'48"	138°13'24"	20130819 ~ 20131011	124m <sup>2</sup>	上信越自動車道 4車線化事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
海道遺跡	集落跡	古代～近世	掘立柱建物1、井戸1、 ピット14、溝2			土師器、須恵器、珠洲焼、 青磁、肥前系陶磁器、平歛	
要約	遺跡は、関川左岸の丘陵から平野部に入った標高24mの沖積地高田面に位置する。現況は高速公路用地内である。調査の結果、前回の調査結果と同様に、古代～近世までの集落跡を検出した。井戸からは中世の木製農具である平歛が2点出土している。						

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第250集

上信越自動車道関係発掘調査報告書XX

### 海道遺跡II

2014(平成26)年2月20日印刷

2014(平成26)年2月21日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

電話 025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第250集

『海道遺跡II』の表記について誤りがありましたので、下記のように訂正してお詫びします。

第IV章　まとめ　5行目　誤：実質調査面積が 124 m<sup>2</sup>　正：147 m<sup>2</sup>  
報告書抄録　発掘面積　誤：124 m<sup>2</sup>　正：147 m<sup>2</sup>